06.12.22 A1

感染力の強さに警戒を

ノロウイルス

東京のホテルで今月初め、300人以上がノロウイルスに集団感染し、吐き気や下痢を訴えた。

客が廊下などに吐いた際の後始末が十分でなかったため、じゅうたんに残ったウイルスが乾いて飛び散り、客や従業員に感染したらしい。

これだけでも感染力の強い病原体であることが分かる。乾燥に強いし、アルコール消毒でも死なない。わずか数個でも発病させる力があるといわれる。

このやっかいなウイルスが今冬、猛威をふるっている。全国各地で集団感染が続き、患者は過去25年で最多だ。今年は子供や老人ばかりでなく、大人が発症することも少なくない。

それでなくても体調を崩しやすい季節だ。ウイルスの特徴をしっかりと頭に入れ、予防に万全の手を打ちたい。

以前から生ガキによる食中毒の原因として知られていた。カキを食べる際にはしっかり加熱した方がいい。子供や老人の場合は、なおさらだ。

最近目立つのは、ウイルスのついた手や調理器具などで汚染された食材を口にしたことによる「二次感染」だ。

ノロウイルスは人の腸内で増え、吐いたものや便に混じって体外に大量に排出される。感染力の強さから、そうした汚物や、それに触れた人の手を通して、大勢の人に広がってしまう。

トイレの後や調理の前には念入りに手を洗う。そんな衛生管理の基本を徹底させる必要があるだろう。

先に挙げたホテルの集団感染のような例もある。人が集まる施設では、呕吐物の処理方法などの手順をしっかりと決めて、従業員らに周知させなければならない。乾く前に塩素系の漂白剤でしっかり消毒する必要がある。

幸いなことに、症状そのものは軽い。1、2日の潜伏期を経て下痢や呕吐などの症状が出るが、普通は2、3日で治まる。全く症状が出ない場合もある。

ただし、抵抗力のない乳幼児や高齢者は、脱水症状を起こしたり、吐いた物をのどにつまらせたりする危険が伴う。そうした人たちの多い施設では、警戒を怠れない。

知っておきたいのは、症状が消えても1週間、長い場合は1カ月もウイルスが出続けることだ。軽症だったとしても気を緩めてはならない。うっかり人にうつすようなことがないように注意したい。

二次感染が増える一方で、カキが敬遠されて価格が急落するという風評被害も各地で広がっている。無用な混乱を防ぐには、国や自治体が速やかに正しい情報を提供することが大切だ。そのうえで、私たちも冷静に行動したい。

人間にしか感染しないノロウイルスは培養ができないことから、研究が進んでいない。この冬の大流行の理由もはっきりしない。効く薬もなく、吐き気や下痢を抑えるといった対症療法しかない。まずは手洗いなど当たり前の衛生管理を忘れないことだ。